

# 追悼 松前 健 先生

松前健先生をしのんで

福田 晃

去る三月二十五日の早朝、松前先生の訃報が届く。真下厚教授からの知らせであった。ここ数年は、学会でお顔を拝見することもなく、『松前健著作集』全十二巻（おうふう）の刊行に励んでおられるご様子であり、その完結をお慶び申し上げなければならぬと思っていた矢先のことである。

私事にわたるが、松前健先生は、国学院大学の先輩であり、院生時代は、その国文学会の折など、あれが『日本神話の新研究』によって日本宗教学会・姉崎賞を受賞された松前さんかと、ひそかな憧れをもって、ご様子をうかがったものであった。しかし当時の松前先生は、『ある神話学者の半世紀』にもふれておられるように、国学院大学にあっては、いささか不遇であられた。それが、学会の懇親会の席などで、先輩・同輩の教授の方々に気を使われるご様子にも表われ、失礼ながら痛々しくさえ感じられたことであつた。

ところが、昭和四十四年の春、京都の平安博物館に専任の助教として赴任された。それは後になつてうかがつたのだが、関西の著名な先生方が相談されて、不遇ななかにある松前さんを引き揚げなさつたということである。そしてその年の五月であつたらうか、京都大学の上田正昭氏が音頭を取られ、歓迎会が催されたが、その主席の松前さんの両脇には、比較神話学者として知られた三品彰英先生と文化人類学者として著名な金岡丈夫先生が控えておられた。その当時わたくしは、大阪の大谷女子大学に勤務していたのであるが、上田氏から声がかかり、あえて出席して司会の指示にしたがい、「松前さんは、わたくしども国学院の輝かしい星である」ことを力説したのである。が、このわたくしの言葉を三品先生がいたく喜ばれ、それが縁で三品先生宅を再三にわたつてお訪ねして、学問上のことのみならず、人事にわたることなどまでもご指導をいただくこととなつた。

さてその松前健先生を本学にお迎えしたのは、昭和五十五年の春、国崎望久太郎教授のご退任の後を受け、古代文学の担当であつた。勿論、神話学のみならず、民俗学をもお委せてできるということで最適の人選であつた。しかし、それにはいささかの経緯があつた。先生には、その前年に、非常勤講師をお願いしたのであ

つたが、たまたまうかがうと、あと一年で天理大学が六十歳の定年になられるということであった。それならば、本学にお迎えしてはと、すぐに案じられたが、「待てしばし」であった。それは、文学部人事では定年教授を迎えるという例は少なく、日本文学専攻としては、専任教授の任用には、できるだけ同じ大学出身者を避けようという申し合わせ——それはわたくしが言い出したこと——があつたればということである。それでもおそろのおそろ日本文学の専攻会議で、古代担当教授の候補として松前先生をあげると、それほどの著名な神話学者を同じ出身校ということにこだわらざるべきではないという、皆さんの一致した意見であつた。そして案じた文学部教授会もほとんど満票で松前先生の任用を決したのである。三十年近く、立命館に勤めて思うことは、本学には、学問研究を第一とする姿勢が一貫して堅持されてきたということである。このときも、松前先生の学問の力と、それを認める立命館の学風に深く感銘を抱いたことであつた。

本学に赴任された松前先生は生き生きとされていた。学問の大成期を迎えられていたわけで、特に大学院の院生たちには強い影響を与えられた。そしてわたくし個人にしても、直接、先生の学問にふれることができ、たいへんな幸せを実感したことである。「福田さん、昔話は神話の後出とは言えませんよ。逆もあるのです」とか、「民族によつては、昔話を保有していないこともあるのです」などという言葉は忘れ得ぬものである。また『立命館文学』第四三五号・四三六号（昭和56年12月）収載の「ヤマトタケ

ル伝承の成立(一)」は、わたくしの専攻する中世語り物文芸の原型を示されたものとして、今もわたくしの懐ろの中にある。また先生からは、学問の視野に、常に東アジアや欧米諸国を置くことを教示された。昭和六十二年五月には、韓国・仁荷大学の招きで、ともども説話研究の国際シンポジウムに参加したが、これは松前先生の仲介によるものであつた。そしてこれがわたくしの朝鮮・中国踏査の第一歩となつた。また平成元年十月には、米国のカリフォルニア大学の招きで、国際シンポジウム「日本の神々」に参加したが、これも松前先生とロスアンゼルス校のヘルベルト・ブルチョウ教授の親交によるもので、奥さまともども、通訳をとめていただいたことは忘れ得ぬこととなつた。

今、思い出は尽きない。そして専任教授としては八年の短期間ではあつたが、本学の日本文学専攻に残された事跡は大きなものであつた。先生の生前のご恩に対し、改めて謝意を申し述べるとともに、先生のご冥福を切にお祈りする次第である。

平成十四年十月

（ふくだ・あきら 本会名誉会員）